

第4学年国語科学習指導案

日 時：平成26年11月12日（水）

場 所：4年1組教室

授業者：谷口 としえ

1 単元名 読んで考えたことを話し合おう

教材名 『ごんぎつね』

2 指導の立場

（1）教材観

ごんぎつねはひとりぼっちで穴の中に住んでいた。そして、寂しさをまぎらわすために、繰り返していたいたずらが思わぬ影響を及ぼしてしまい、後悔する。場面が進んでいくうちに、せめてもの償いの気持ちと一方的な兵十に対する共感、なかなか自分のことを認めてもらえないむなしさをごんは感じる。そして、やっと心が通じ合ったのは、兵十に銃で撃たれてしまう死の直前であった。民話的な舞台を背景に繰り広げられるこの物語は、通じ合いたいと切に願いながらも通じ合えないごんと兵十の心のすれ違いが、非情な悲しさやむなしさ、哀れさを生むことを教えている。

本単元では、「読んで考えたことを話し合おう」をねらいとし、出口に「ごんの気持ちの変化や兵十とのすれ違いを読み取り、自分の立場をはっきりさせて話し合い、それを生かして続き話を書く」活動を設定した。場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化などについて、叙述を基に読み取る力を身に付けさせたい。また、物語の中にちりばめられている視覚的描写や比喩表現をじっくりと読み深めることを通して、ごんや兵十の気持ちなどを想像し、それを自己表現に結び付け、人に伝える意欲へとつなげていきたい。そして、一人一人の感じ方について違いがあることに気付けるようにしたい。

（2）研究との関わり

【児童の実態】

- ・「白いぼうし」や「一つの花」の学習では、登場人物の行動や会話から気持ちを想像して読むことができるようになってきている。しかし、言葉を根拠にして読み取ることができる児童が3分の1程度である。また、言葉と言葉、場面と場面をつないで登場人物の気持ちの変化を考えることができる児童は少ない。
- ・ほぼ全員の児童が自分の考えを進んで話そうと意識している。また、ノートに書いていない時でも、仲間の意見を聞き、その内容の良さや自分のとの違いに気づき、仲間の意見につないでさらに自分の考えや意見を深めたりしていくことができる児童が半数ほどいる。

研究内容1

（1）付けたい力を明確にし、単元を貫く言語活動を設定する。

①付けたい力

- ・場面の移り変わりや、登場人物の性格や気持ちの変化などについて、叙述を基に想像して読み取る力
- ・理由を明確にして自分の考えを伝え合い、一人一人の感じ方の違いに気付く力

②単元を貫く言語活動の設定

- ・単元の出口に「ごんの気持ちの変化や兵十との心のすれ違いを読み取り、自分の立場をはっきりさせて感想を話し合い、続き話を書く」活動を位置付ける。そのために、ごんの生い立ちをもとに、場面と場面のつながりに気を付けて、兵十との関わりの変化を十分に読み取ることができるようにする。また、毎時間の読み取りのまとめとして、ごんに対する自分の考えをまとめることで、第3次の材料となるようにしたい。

研究内容2

（2）考えを広げ、深めるための効果的な交流活動の工夫する。

- ・情景描写や心理描写に着目したり、言葉を比べたり、場面をつなげたりしながら、ごんの気持ちの変化や兵十との関わりの変化を読み取ることができるようにする。
- ・六場面で、ごんから兵十への視点へ切り替えることにより、ごんと兵十の心のすれ違いの悲しさという主題にせまっていけるようにしたい。
また、深めの発問をすることで、やっと2人の気持ちが通じたが、悲しい結末になってしまい、後悔する兵十の気持ちをとらえさせたい。

めざす児童の姿

- ・会話文や行動描写、情景描写に着目して、言葉や場面をつないで登場人物の性格や気持ちの変化、関係の変化などについて想像して読み取ることができる。
- ・場面ごとや物語全体について、理由を明確にして感想をまとめ、交流を通して互いの感じ方の違いに気付くことができる。

3 本時のねらい

ごんをぬすつとぎつねとしか思っていなかった兵十とごんの兵十に対する償いの気持ちが悲劇を生んだことに気付き、兵十が今までのごんの行為を知って、銃で撃ったことを後悔し、心がすれちがった悲しさを読み取ることができる。

4 本時の展開（8／11）

	学習活動	指導・援助、※評価規準 ◎交流の形態
つかむ	1. 前時の学習を振り返り、六場面の流れをつかむ。 ・兵十と加助の会話を聞き、自分のしていることに気付いてもらえないことにつまらないと思っているごんの気持ちを思い出す。また、それでも、くりを持って行き、銃にうたれてもうなずくごんと、それを見た兵十の気持ちを考えることを知る。	・前時までのごんや兵十の様子と、六場面のごんと兵十の行動を押さえる。
考えるをもつ	2. 本時の課題をつかむ。 ごんをうってしまった兵十とうたれたごんの気持ちを読み取ろう。	A：線を引き、ごんや兵十の気持ちを書いている児童に対して ・根拠を明確にして、気持ちの変化を考えられるようにする。 「ごん」「おまい」「目を落とす」「取り落とす」 ・2人の心のすれ違いを明確にするようにする。 ・前の場面との違いを見つけて兵十の気持ちの変化を読み取るように伝える。
深める	3. 六場面を読みながら、ごんや兵十の気持ちが分かる言葉に線を引き、どんな思いでいるかを読み取る。（一人読み） 4. 読み取ったことを交流し、ごんや兵十の気持ちを読み取る（全体交流） 「ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました」 ・残念だけど、やっと分かってもらえてよかった。気付いてもらってうれしい。 「うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらを」 ・一場面とつなげて、ずっとごんをうらんでいる。にくんでいる。 「目に付きました」「おや」 ・なぜ、ここにくりがあるのか？ 「目を落としました」「ごんぎつねめ」→「ごん」→「おまい」 ・まさか、おまえがくりを届けてくれていたのか？ ・本当のことを知って、兵十がとてもびっくりしている。 「兵十はばたりと取り落としました。」 ・なんてことをしてしまったのか。気付かずにうってしまった。ごめんよ。本当に悪いことをしてしまった。深く後悔している。	B：ごんや兵十の気持ちが書けない児童に対して ・まず、ごんの前時までの気持ちを確認し、考えのきっかけをもてるようにする。
	【深めの発問】 「青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。」から、2人のどんな気持ちが分かるだろう。 ・青いからさびしいし、細いけむりだから消えていく悲しさがある。この文があることで、「なんてことをしてしまったんだ」という兵十の気持ちと「最後に分かってもらえてよかった」というごんの気持ちの心のすれちがいの悲しさがずっと続いていることが伝わってくる。 最後に代表児童が六場面のまとめを、兵十の気持ちを根拠をもとに話す。	【深めの発問の意図】 白いけむりではなく、青色を使ったことや細く出ていたという所からで、兵十の後悔の気持ちや、心のすれちがいが悲しい結末をむかえたことが強く出ていることに気づけるようにする。
まとめる	5. 読みのまとめとして、兵十とごんの気持ちのすれちがいと自分の考えをまとめる。 ごんは、前の場面で「引き合わない」と言い、気づいてもらえないと分かっているにも栗を持って行ったところから、兵十とつながっていたという親しみの気持ちが強くなってきていたのだが、撃たれてしまい、残念な気持ちと分かってもうなずきと気持ちがうなずきに表れていることが分かった。 兵十は、いつものように悪さをしにやってきたと思っていたのだけど、撃って初めて、栗や松茸をもってきてくれたのがごんだと分かって、おどろいたし、やさしいごんを撃ってしまって「なんてことをしてしまったのだろう」という悲しみと後悔の気持ちが、初めて「ごん」とよんでいることや「銃を取り落とした」と「青いけむり」いうところから分かった。 やっとごんの気持ちが通じたのに、兵十に撃たれてしまうなんて、このすれちがいがとても悲しいと思った。	◎全体交流 ・ごんと兵十の心のすれちがいの悲しさに気付けるように、全体交流を位置付け、仲間の意見と関わらせながら、読み深められるようにする。 ※ごんを撃ってしまった兵十の、後悔する気持ちと、兵十に撃たれたごんの悲しみや、分かってもらえてよかったと思う気持ちのすれちがいを読み取っている。（読） 【発言・ノート】

第4学年国語科学習指導案

日 時：平成26年11月12日（水）

場 所：4年2組教室

授業者：鈴木 有美

1 単元名 読んで考えたことを話し合おう

教材名 『ごんぎつね』

2 指導の立場

（1）教材観

ごんぎつねはひとりぼっちで穴の中に住んでいた。そして、寂しさをまぎらわすために、繰り返していたいたずらが思わぬ影響を及ぼしてしまい、後悔する。場面が進んでいくうちに、せめてもの償いの気持ちと一方的な兵十に対する共感、なかなか自分のことを認めてもらえないむなしさ。そして、やっと心が通じ合ったのは、兵十に銃で撃たれてしまう死の直前であった。民話的な舞台を背景に繰り広げられるこの物語は、通じ合いたいと切に願いながらも通じ合えないごんと兵十のすれ違いが、非情な悲しさやむなしさ、哀れさを生むことを教えている。

本単元では、「読んで考えたことを話し合おう」をねらいとし、出口に「ごんの気持ちの変化や兵十とのすれ違いを読み取り、自分の立場をはっきりさせて話し合い、それを生かして続き話を書く」活動を設定した。場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化などについて、叙述を基に読み取る力を身に付けさせたい。また、物語の中にちりばめられている視覚的描写や比喩表現をじっくりと読み深めることを通して、ごんや兵十の気持ちなどを想像し、それを自己表現に結び付け、人に伝える意欲へとつなげていきたい。そして、一人一人の感じ方について違いがあることに気付けるようにしたい。

（2）研究との関わり

【児童の実態】

- ・「白いぼうし」や「一つの花」では、会話や行動から登場人物の気持ちを想像して読むことが少しずつ出来るようになってきている。しかし、言葉に着目して短く線を引き、読み取ることが出来る児童は10人ほどである。また、言葉と言葉をつないだり、場面と場面をつないだりなどの「読み取りの技」を使って読み深められる児童は少ない。
- ・自分の読みを発表しようという意欲は少しずつ高まってきており、3分の2以上の児童が自分の考えを進んで話そうと意識している。しかし、仲間の意見からさらに自分の読みを深めたり広げたりして練り合い、深い読みにつなげることができる児童は少ない。

研究内容1

（1）付けたい力を明確にし、単元を貫く言語活動を設定する。

①付けたい力

- ・場面の移り変わりや、登場人物の性格や気持ちの変化などについて、叙述を基に想像して読み取る力
- ・理由を明確にして自分の考えを伝え合い、一人一人の感じ方の違いに気付く力

②単元を貫く言語活動の設定

- ・単元の出口に「ごんの気持ちの変化や兵十との心のすれ違いを読み取り、自分の立場をはっきりさせて感想を話し合い、続き話を書く」活動を位置付ける。そのために、ごんの生い立ちをもとに、場面と場面のつながりに気を付けて、兵十との関わりの変化を十分に読み取ることができるようになる。また、毎時間の読み取りのまとめとして、ごんに対する自分の考えをまとめることで、第3次の材料となるようにしたい。

研究内容2

（2）考えを広げ、深めるための効果的な交流活動の工夫する。

- ・情景描写や心理描写に着目したり、言葉を比べたり、場面をつなげたりしながら、ごんの気持ちの変化や兵十との関わりの変化を読み取ることができるようになる。
- ・三場面では、償いをし始めたごんが、何日も兵十の家に通ううちに、兵十に対する思いが高まっていることを、兵十の気持ちと比較することによって、ごんと兵十の心のすれ違いの悲しさという主題にせまっていけるようにしたい。また、深めの発問をすることで、一方的に兵十とつながりをもっているような気になりはじめているごんの気持ちを、より深く考えさせたい。

めざす児童の姿

- ・会話文や行動描写、情景描写に着目して、言葉や場面をつなげて登場人物の性格や気持ちの変化、関係の変化などについて想像して読み取ることができる。
- ・場面ごとや物語全体について、理由を明確にして感想をまとめ、交流を通して互いの感じ方の違いに気付くことができる。

3. 本時のねらい

「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」「まず一つ」「次の日も、その次の日も」という言葉に着目することを通して、兵十の境遇に共感し、自分の罪の重さを感じて、うなぎの償いをしたいと思うごんの気持ちに気づき、兵十へ思いを寄せていくごんの気持ちを読み取ることができる。

4. 本時の展開（ 6／11 ）

	学習活動	個に応じた指導・援助 ※評価規準 ◎交流の形態
つかむ	1. 前場面を振り返り、三場面の流れをつかむ。 ・軽い気持ちで兵十にいたずらをしてしまったことを深く悔やみ、償いをするごんの気持ちを考えることを知る。 2. 本時の課題をつかむ。 つぐないをするごんの気持ちを読み取ろう。	A：兵十に悪いことをしたという気持ちで届けていると考えている児童に対して ・単純に反省や後悔だけならば、何度も届ける必要はないはずなのに、自分でくりを「どっさり拾って」「くりばかりでなく、松たけも」届けるなど、自分と同じ境遇の兵十に対する思いが強まっていることに気付くようにする。
考えをもつ	3. 三場面を音読し、償いをするごんの気持ちが分かる表現に線を引き、気持ちを読み取る。（ひとり読み） 4. 償いをするごんの気持ちが分かる部分とその思いを交流する。（全体交流） 「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」 ・かわいそうだな。うなぎを逃がしたりしなければ良かったな。 ・兵十もおれと同じでさみしいだろうな。 「まず一つ、いいことをした」 ・これからもたくさん兵十の家にいるいろいろなものを持っていこう。悪いことをしたつぐないをしよう。 ・兵十は、きっと喜んでくれるだろう。 「物置の後ろから見ていた」「うら口からのぞいて」 ・自分のせいでひとりぼっちになってしまった兵十は、どうしているだろうなあ。気になるなあ、元気かなあ。 「次の日も、その次の日も…」 ・前の日も行ったけど、もっと食べ物を持って行ってあげたい。 ・ひとりぼっちでさみしいだろうから、栗だけでなくいろいろ持って行ってやろう。 【深めの発問】 悪いことをしてしまったから、許してもらおうと思って毎日食べ物をお届けしているのだろうか。	B：ごんがどんな気持ちでくりなどを届けているか分からない児童に対して ・「まず一つ、いいことをした」と思っているところから、ひとりぼっちになった兵十に、悪いことをしてしまった償いをしようとしていることに気付くようにする。
深める	【深めの発問】 悪いことをしてしまったから、許してもらおうと思って毎日食べ物をお届けしているのだろうか。 ・自分もひとりぼっちでさみしいから、自分と同じようにひとりぼっちになってしまった兵十は、きっとさみしく思っているだろう。自分のせいでひとりぼっちになってしまったのだから、兵十のことが気になって気になって仕方がない。だから、兵十のために何かしたい。 最後に代表児童が、三場面のまとめを、ごんの思いをふくめて話す。	【深めの発問の意図】 つぐないの気持ちだけでなく、兵十の境遇に共感しての行動であることに気づき、一方的に兵十に思いを寄せていくごんの気持ちをより深く考えられるようにする。
まとめる	5. 学習のまとめをする。 ごんは、いたずらをしたつぐないの気持ちと、自分と同じ一人ぼっちという境遇になった兵十に何かしたいと思う気持ちから、兵十に食べ物を届けるようになった。自分のせいでひとりぼっちになってしまった兵十がとても気になって、兵十のために何かしたいという一生懸命な気持ちが強くなっていることが分かった。 兵十の気持ちが分かり、相手を思いやれるいいきつねに変化してきた。兵十のためだけを思っつぐないをし続けるところから、ごんはいつも兵十のことを考えているんだろうなあと思った。	◎全体交流 ごんの兵十に対する思いが次第に強くなっていくことに気付けるように全体交流を位置付け、仲間の意見と関わらせながら、読み深められるようにする。 ※同じ境遇になった兵十に対する同情や共感、償いの気持ちに気づき、兵十に思いを寄せていくごんの気持ちを読み取っている。【発言・ノート】

単元指導計画

【一つの花】

◎登場人物の気持ちの変化、情景などについて、叙述をもとに想像して読むことができる。

<言葉見つけの視点>

・くり返し ・題名
・ダッシュ ・会話

<読み取りの技>

・あるなし読み
・言葉と言葉をつないで読む

【ごんぎつね】

◎場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、登場人物の関係の変化、情景などについて叙述をもとに想像して読むことができる。 【読（１）ウ】

○文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くことができる。 【読（１）オ】

<言葉見つけの視点>

・行動描写 ・情景描写（視覚表現・聴覚表現）・挿絵

<読み取りの技>

・あるなし読み
・場面と場面をつないで読む。
・言葉と言葉をつないで読む

【三つのお願い】

◎登場人物の性格や気持ちの変化、人物の関係を想像し、叙述をもとに登場人物の行動に共感するかしないかを想像して読むことができる。

<言葉見つけの視点>

・行動描写 ・会話表現
・情景描写

<読み取りの技>

・言葉と言葉をつないで読む
・自分とくらべて読む

次	時	ねらい	学習活動	着目する語句、表現	指導の手立て ※評価規準
1次（見通しをもつ過程）	1	・「ごんぎつね」を読み、ごんと兵十の関係についての感想をもつことができる。	1. 範読を聴き、「ごんぎつね」の大まかな内容をつかむ。 お話を読んで感想をもち、心に残ったところを中心に感想を書こう。 2. 心に残ったことや疑問に思ったことを中心に、感想を書く。 3. 語句調べをする。	☐ 新美南吉 ☐ ごん ☐ 兵十	・登場人物や時代背景など、読み取りに必要なことを補足する。 ・なぜそう思ったのか理由も付けて書くようにする。 ※話を読んで思ったことを感想に書いている。【ノート】
	2	・感想交流を通して、場面ごとの課題を作り、単元を通した学習のめあてをもつことができる。	1. 感想や疑問を交流し、各場面の学習課題をつくる。 感想をもとに、読み深めたいことを話し合おう。 2. これからの学習の見通しをもち、単元を通した学習課題を確認する。 ごんや兵十の気持ちや関わりの変化を場面をつなげて読み、根拠をはっきりさせて自分の考えを伝えていこう。 また、続きの話を作ってみよう。	☐ ごん ☐ 兵十	・どの場面でどう考えたのかを明らかにして、交流できるようにする。 ※感想や疑問を話し合い、読み取りの学習計画をたて、学習の見通しをもっている。【発言・ノート】

3	・物語の設定部を読み、物語の時代や場所、登場人物とその性格を読み取ることができる。	1. 一場面前半を読み、物語の時代、場所、登場人物の確認をする。 ごんの性格や生き立ちを読み取ろう。 2. ごんの境遇や性格、様子を表す言葉などに着目する。（一人読み） 3. 読み取ったことを交流をする。（全体交流） 【深めの発問】 なぜそんなにいたずらばかりするのだろう。 4. 読みのまとめとして、ごんの性格とごんに対する自分の考えを書く。 ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねだからさみしいし、話す相手も遊ぶ相手もなくて、毎日退屈することがなかったから、いたずらばかりしていたんだろうな。人のいるところにいつも来ているので、人といっしょにいたいことが分かる。困らせたいわけではなく、悪いきつねではないみたいだ。だけど、村の人にはそんな思いは伝わっていないだろうな。	☐少しはなれた ☐ひとりぼっちの小ぎつね ☐あなをほって ☐夜でも昼でも ☐いたずらばかり	・ごんの境遇や行動から、ごんの性格を想像させていく。 ※物語の設定部を読み、場面やごんの性格について叙述をもとに想像して読んでいく。【発言・ノート】
4	・兵十を観察したり、兵十の捕った魚を逃がしたりするごんの様子から、ごんが兵十に相手にして欲しいと思っていることに気づき、ごんがひとりぼっちで寂しい気持ちでいることを読み取ることができる。	1. 前時の振り返りをし、ごんがいたずらをする場面であることを確認する。 兵十にいたずらをしたごんの気持ちを考えよう。 2. 一場面後半を読み、兵十にいたずらをしたごんの気持ちを想像する。（一人読み） 3. 読み取ったことを交流をする。（全体交流） 【深めの発問】 ごんは、うなぎが欲しくていたずらをしたのだろうか。 4. 読みのまとめとして、いたずらばかりするごんの気持ちと、ごんに対する自分の考えを書く。 ごんは2, 3日ぶりにやっと外に出られて、いつものように何かいたずらをしてやろうという気持ちでいたのだと思う。でも、兵十は、必死にうなぎをとっているのに、いたずらされて、どなりたてるほど、ごんのがにくらしかったし、殺してやろうと思ったことが分かる。 ごんは、うなぎがほしいわけではなく、兵十だからいたずらしよう、相手にしてほしいという気持ちで楽しんでいただけれども、兵十にはそんなことは伝わらないし、どうしてもうなぎがほしかったみたいだから、心がすれちがっているなあ。	☐空はからっと ☐キンキン ☐見つからないように ☐そうっと ☐じっと ☐ちょっと、いたずら ☐ぬすつとぎつねめ ☐飛び上がる	・叙述をもとに、いたずらをしたときのごんの気持ちを想像し、なぜいたずらをしたのか考えていく。 ※人間とかかわりをもちたくていたずらをするごんの気持ちを読み取っている。【発言・ノート】

2 次（読み方を習得する過程）	5	・兵十の「なんだかしおれている」様子を見て、「ちょっ、あんな～」に着目し、自分が兵十の母親を死なせてしまったと考えたごんの気持ちに気づき、いたずらを後悔している心情を読み取ることができる。	1. 前時の振り返りをし、兵十のお母さんの葬式の場面であることを確認する。 そうれつを見たごんの気持ちを読み取ろう。 2. 二場面を読み、兵十のおっかあのそうれつを見たごんの気持ちを想像する。（一人読み） 3. 読み取ったことを交流する。（全体交流） 【深めの発問】 ごんのいたずらのせいで、兵十のおっかあが死んでしまったのだろうか。 4. 読みのまとめとして、後悔をしているごんの気持ちと、ごんに対する自分の考えを書く。 ごんのせいでおっかあが死んでしまったかどうかは分からないのに、ごんは自分のいたずらとつなげて、～ちがいない」「しなけりゃよかった」と深く反省していることがよく分かる。自分のせいで・・・と素直に反省できる本当はいいきつねなのかもしれない。	☐ ひがんだ花が赤い きれのように ☐ ふみ折られる ☐ なんだかしおれていました ☐ ～ちがいない ☐ ～だろう ☐ 「ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった」	・情景描写や、会話文の接続詞に着目して読み深める。 ※自分のいたずらと兵十のおっかあの死を結びつけて考え、後悔するごんの素直な気持ちを読み取っている。 【発言・ノート】
	6（本時四年二組）	・「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」「まず一つ」「次の日も、その次の日も」という言葉に着目することを通して、兵十の境遇に共感し、自分の罪の重さを感じて、うなぎの償いをしたいと思うごんの気持ちに気づき、兵十へ思いを寄せていくごんの気持ちを読み取ることができる。	1. 前時の振り返りをし、ごんが兵十に償いをする場面であることを確認する。 つぐないをするごんの気持ちを読み取ろう。 2. 三場面を読み、償いをするごんの気持ちを想像する。（一人読み） 3. 読み取ったことを交流する。（全体交流） 【深めの発問】 悪いことをしてしまったから、許してもらおうと思って毎日食べ物をお届けしているのだろうか。 4. 読みのまとめとして、償いをし続けるごんの気持ちと、ごんに対する自分の考えを書く。 ごんは、いたずらをしたつぐないの気持ちと、自分と同じ一人ぼっちという境遇になった兵十に何かしたいと思う気持ちから、兵十に食べ物を届けるようになった。自分のせいでひとりぼっちになってしまった兵十がとても気になって、兵十のために何かしたいという一生懸命な気持ちが強くなっていることが分かった。 兵十の気持ちが分かり、相手を思いやれるいいきつねに変化してきた。兵十のためだけを思っつぐないをし続けるところから、ごんはいつも兵十のことを考えているんだろうなと思った。	☐ おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か ☐ つぐない ☐ まず一つ、いいことをした ☐ 物置の後ろから見ていた ☐ うら口からのぞいて ☐ 「かわいそうに」 ☐ 次の日も、その次の日も	・心内語、行動描写、繰り返し言葉などに着目して読み深める。 ※同じ境遇になった兵十に対する同情や共感、償いの気持ちに気づき、兵十に思いを寄せていくごんの気持ちを読み取っている。 【発言・ノート】

7	・「つまらない」「引き合わない」という言葉に着目することを通して、ごんが、隠れてしているながらも、兵十に自分がしていることだと知って欲しいと思っていることに気づき、神様の仕業と言われて納得がいかないごんの心情を読み取ることができる。	1. 前時の振り返りをし、ごんが加助と兵十の会話を聞いている場面であることを確認する。 二人の後をつけて、会話を聞いたごんの気持ちを読み取ろう。 2. 四、五場面を読み、二人の会話を聞いたときのごんの気持ちを想像する。（一人読み） 3. 読み取ったことを交流をする。（全体交流） 【深めの発問】 償いの気持ちでやっているのだから、神様の仕業と言われても気にならないのではないだろうか。 4. 読みのまとめとして、「こいつはつまらない」と思うごんの気持ちと、ごんに対する自分の考えを書く。 どんな話をしているのかじっと待っていたり、「かげをふみふみ」ができるほど近づいたりした所から、自分のしていることを気付いているか気になっている、みとめてほしいと思っていることが分かった。だから、神様の仕業だと言われて、何だか納得いなくて「引き合わないなあ」という言葉が出たのだろう。 ごんは、同じ状況の兵十に気付いてほしい、分かり合いたいという気持ちが強くなってきているなあと思った。	☐かくれて、じつと ☐二人の後をつけて ☐びくっとして ☐かげぼうしをふみふみ ☐つまらないなあ ☐持って行ってやるのに ☐引き合わないなあ	・ごんの心内語や二人との位置関係などから、ごんの気持ちを考えていく。 ※償いではあるが、兵十に認めてもらいたいごんの気持ちを読み取っている。【発言・ノート】
8（本時四年一組）	・ごんをぬすつとぎつねとしか思っていないかった兵十とごんの兵十に対する償いの気持ちが悲劇を生んだことに気づき、兵十が今までのごんの行為を知って、銃で撃ったことを後悔し、心がすれちがった悲しさを読み取ることができる。	1. 前時の振り返りをし、兵十に撃たれてしまう場面であることを確認する。 ごんをうってしまった兵十とうたれたごんの気持ちを読み取ろう。 2. 六場面を読み、兵十の気持ちを想像する。（一人読み） 3. 一人読み後、全体交流をする。 【深めの発問】 「青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。」から、2人のどんな気持ちがわかるだろう。 4. 読みのまとめとして、兵十とごんの気持ちのすれ違いと、自分の考えを書く。 前の場面で「引き合わない」と言い、ながら、まだ栗を届けに行ったごん。兵十は、いつものように悪さをしにやってきたと思ったのだが、撃って栗を見つけて初めて今までの栗や松茸はごんが持ってきてくれたものだとなり、とても驚いたし、やさしいごんを撃ってしまった悲しみと後悔でいっぱいになったことが、「ごん」と呼びかけたり、「取り落とした」「青いけむり」という所から分かった。 やっと気持ちが通じたのに、兵十に撃たれてしまうなんて、このすれ違いがとても悲しいと思った。	☐ぐったりと ☐うなずきました ☐ぬすみやがった。 ☐ごんぎつねめ ☐またいたずら。 ☐ごん、おまいだったのか ☐火なわじゅうをばたりと取り落とししました ☐青いけむり ☐細く出て	・兵十の行動描写や情景描写から、兵十の気持ちの変化を読み取っていく。 ※ごんを打ってしまった兵十の後悔する気持ちと、兵十に撃たれたごんの悲しみや、分かっただけでよかったと思う気持ちのすれちがいを読み取っている。【発言・ノート】

3 次 (読み方を活用して読む過程)	9	第3時から第8時までのごとと兵十の気持ちの移り変わりを確認し、第2次で書き溜めた自分の考えをもとに、根拠を明らかにして感想をもち、自分の考えを交流し合い、互いの考え方の違いの良さを感ずることが出来る。	1. 課題をつかむ。 くわしく読んだことをもとに、感じたことや考えたことをまとめて交流しよう。 2. 今までの読み取りをもとに、ごとと兵十の気持ちを確認する。 3. 根拠を明らかにしながら、自分の考えをまとめる。 4. 自分の考えをグループで発表し合い、感想や意見を交流する。		これまでの読み取りを参考に、自分の立場とその根拠を明らかにして、感想を書き、考えを交流する。 ※考えを交流し合い、互いの考え方の違いの良さを感ずている。 【発言・ノート】
	10	読んで考え、話し合ったことを生かして、続き話を書くことができる。	1. 課題をつかむ。 読み取ったことをもとに、続きはどうなるか考えて書いてみよう。 2. 今までの読み取りや表現方法を振り返る。 3. 続き話を考えて書く。		四場面を参考に、情景描写や場所の設定を冒頭に書き、短い文で会話を中心に書くとよいことを押さえる。 ※作品の特徴とこれまでの読み取りをふまえて、作品を書いている。【作品】
	11	ごんぎつねの続き話を発表し合い、感想や意見を伝え合って、互いの考えや表現の良さを感ずることが出来る。	1. 課題をつかむ。 自分たちの考えた続き話を発表し合い、感想や意見を交流しよう。 2. 代表児童の続き話を聞き、感想を交流する。 3. グループの交流の仕方を確認し、グループごとに続き話を交流する。		全体交流の中で、グループの交流の進め方や感想の伝え方が分かるようにする。 ※続き話を発表し合い、仲間の感想や意見を交流して、互いの考えや表現の良さを感ずている。 【発言】